

ジョルジュ・バタイユ『小さきもの』の 家族と神学

起源についての問い

岩野 卓司

バタイユはエロティシズムの作家と言われる。文学のジャンルでは、『眼球譚』にはじまり、未完の『わが母』や『シャルロット・ダンジェルヴィル』に至るまで、彼の一連の小説作品にはきわどい性描写、猥雑な表現、スカトロ嗜好が数多く見られる。また、『エロティシズム』や『エロスの涙』という思想書では、エロティシズムを「死に至るまでの生の称揚」という視座から探求している。さらに、『無神学大全』のような哲学・神学的な著作群でも、神秘的経験と性的な経験が互いに交錯して語られている。それとともに、晩年に『神的なる神 (*Divinus Deus*)』の名のもとで体系化される予定だった三部作をはじめ、彼の小説や物語の多くにおいては、「神」、「神的なるもの」、「聖なるもの」の探求が行なわれていた。また、『無神学大全』はもとより、『エロティシズム』や『呪われた部分』三部作においてもそれぞれのやりかたでこれら「聖なるもの」が論じられている。彼にとって、エロティシズムと神性は深く交わるものであったのだ。こういった中で、晩年の『わが母』と40年代の自伝的物語『小さきもの』は、家族のテーマと結びついていう点で異彩を放っている。家族とエロティックな神性のこの結びつきを、私たちは「家族神学」という問題系で捉えることもできるだろう。ヘーゲルによる『精神現象学』や『法哲学』の中のアンチゴネー論やフロイトの『トーテムとタブー』などに典型的に見られるように、家族の問題系は広い意味での神学的な問題系と深いところでリンクしているからだ。バタイユの作品では、基本的にヘーゲルやフロイト同様に、近代ブルジョアの家族が描かれているが、バタイユの追及する「神的なるもの」がキリスト教の神から逸脱していくにつれて、古典的な家族も破壊され変容していく。この点について、私たちは『わが母』を取り上げながら、「至高性と分身——ジョルジュ・バタイユ『わが母』における神学と近親相姦」（『別冊水声通信 セクシュアリティ』）の中でこの問題をとりあつかった¹。「家族神学」に先行

¹ 岩野卓司「至高性と分身——ジョルジュ・バタイユ『わが母』における神学と近親相姦」,『別冊水声通信 セクシュアリティ』,水声社,2012, pp. 237-257.

するもの、「家族神学」の変質、「不在としての神」と「不在としての家族」の共鳴がこのテキストに内在していることが読み取れた。そして、エロティシズムを通しての家族と神性との繋がりとは、1943年に出版された自伝的な物語『小さきもの』の中でも、はっきりと現われている。母と子の近親相姦の関係を軸にした『わが母』とは異なり、この物語は話者の罪悪感が語られ、それがさらに神の幻想と重なっている。この物語のもうひとつの特色は、罪悪感の起源が明かされている点である。つまり、父をめぐる話者の忌まわしい幼少期の経験と自分の犯した罪が語られている。この点、『眼球譚』において、フィクションの物語がその作家の幼少期の体験に照らしあわされて精神分析流に答え合わせをしているのと類似している。『小さきもの』では、「家族神学」の問題系は幼少期の秘密と密接にからみあっているのだ。以下、幼少期の経験という起源と「家族神学」の問題系との関係について考えてみよう。

1) 「小さきもの」と罪悪感

a) 「小さきもの (petit)」という語の意味

まずは物語の題名にもなっている「小さきもの (petit)」という語の意味をはっきりさせる作業からはじめてみよう。「小さい」を意味する形容詞のこの言葉が名詞になると、ふつう「子供」や「息子」の意味でよく使われる。この意味は物語の表題の最初の意味として私たちの視野に入ってくる。と言うのも、この物語は父親への罪悪感に苛まれる息子の物語だからである。だが、物語が進行するにつれて、もうひとつの別の意味が露わになる。「小さきもの (petit)」は、売春宿では尻の割れ目や肛門の意味で使われている、という事実が明かされるからである。

ある日、裸の娼婦を抱きながら、彼女の尻の割れ目を指で愛撫した。私は彼女にそっと『小さきもの』について語った。彼女は理解した。売春宿で時折そう呼ばれるということを、私は知らなかった²。

² L.P., O.C., t. III, p. 37. プレイヤード版の注はこの呼び名について次のような引用で確証を与えてくれる。「『小さきもの』[...] 小さな穴、すなわち肛門、菊門。小さきものに入れること、つまりかまを掘ること」(*Le Petit Citateur. Curiosités érotiques et pornographiques de J.-Ch-X [Jules Choux], Paphos, 1881*), cité par Cécile Moscovitz, « *Le Petit. Notes et variantes* », in Georges Bataille, *Romans et récits*,

以上が「小さきもの」のもうひとつの意味である。売春宿で使われるこの隠語をかみしめながら話者の連想は広がっていく。「小さきもの」というこのタームは話者にその幼少期を思い出させる。それは、尻の割れ目のように汚らわしい隠すべき幼少期なのだ。

もし隠すことを余儀なくされる汚れて埋もれた幼少期を私が思い起こすのなら、私の中の最も優しい声が叫び声をあげる。私自身が『小さきもの』である。私には隠れた場所しかない³。

話者自身はふたつの意味で「小さきもの」である。彼が家族の中で「小さきもの」であった幼少期は、暗く呪われた時期である。彼は、肛門と同じくらい隠すことを余儀なくされた汚れた存在である。この時期は彼の悔恨の対象であり、過去の赦されざる思い出を恥じて、彼は泣き出すほどである。曰く、「『小さきもの』の汚れた息苦しさがなければ、私の話はなんと愚かしいことであろう。昨日もまた私は横になり涙を流し恥辱に狂うことができた。昨日あったような恐怖の叫びをどのようにあげるべきであろうか⁴。」このように「小さきもの」という言葉は、家族、エロティシズム、秘密、隠されたもの、罪悪感が交差する場を、ふたつの意味によって構成していると言えるであろう。

b) 不可能なものについての神経症の幻想^{ファンタズム}

「小さきもの」のこの悔恨をめぐって、話者は自分が神経症であることを告白する。こういった医学の名称を使用して自分の状態を表現しているのにもかかわらず、彼は自分の悔恨に医学的な解決法を適用しようとはしない。

「精神医学を使って私の振る舞いを説明するなんて、[...]、なんと滑稽なことだろう。それは、私のように『小さきもの』を使って説明することなのだ⁵。」彼は医学的説明に満足する代わりに、神経症的な悔恨と戯れる。それは「不可能なもの」に至る戸口だからである。ここで考慮にいれなければならないことは、この病気の解決できない謎である。「神経症は、人々がその

Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2004, p. 1161)。なお略号は O.C. : *Œuvres complètes* ; L.P. : *Le Petit* ; H.O.P. : *Histoire de l'œil, première édition* ; H.O.N. : *Histoire de l'œil, nouvelle édition* ; L. C. : *Le coupable*。

³ L.P., in O.C., t. 3, p. 37.

⁴ *Ibid.*, p. 40, cf. p. 38.

⁵ *Ibid.*, p. 41.

不可避な本性を受け入れるかわりに、ある偶々の原因を与える不可能な底を臆病に把握することである。不可能なものは存在の底なのだ…⁶」話者が「不可能なもの」に接近できるのは、神経症のおかげなのである。「不可能なもの」は知や概念によって説明できるものではなく、経験にのみ開かれたものであろう。『内的経験』をはじめとする『無神学大全』や戦後の一連の講演で語られている「非一知」や「未知なるもの」が、ここでは再び見いだされる。バタイユはピエール・ジャネを引き合いに出しながら「非一知」は精神医学のような科学理論によつては説明できないと主張したが、ここでもそれと同じ考え方が読み取れるであろう⁷。

そして、「不可能なもの」へのこういった接近は、物語にさまざまな神学的ファンタズムをもたらししている。そこでは、神は善き神の制限を乗り越えながら悪やエロティシズムの頂点に輝いている。「この神は […] 狂っている⁸」。「悪にふける神⁹」。「神」は「六十代の処女の数々の接吻に飾り立てられて¹⁰」死んでいく。「盲目の」「神¹¹」。神は自分自身であるにとどまらず、それを受け入れたら自身が不可能になってしまうような属性を受け入れている。話者はこう語る。「放蕩とは、完全に俗悪な仮面の下にある神の不可能な面である。ここでは神だけが仮面をつけており、不可能なものはそうではない。神とは、教会に対して不可能なものがつけた完璧な仮面である。」ここで、神が「不可能なもの」の仮面にすぎないということ、キリスト教教会のための仮面にすぎないということに注意しよう。だから、神がその本性において自己を曝け出すなら、彼はまさに「不可能なもの」と化すであろう。「神のかわりに…／不可能なもの／しか／ないであろう。／神ではなく¹²。」バタイユの作品の中で数多く語られている神的なるものの両義性は、ここでは神の不可能性に帰着している。神は神的であればあるほど自らであることはできなくなるのである。これは後にマダム・エドワルダの序文ではっきりと宣

⁶ *Ibid.*

⁷ バタイユによるジャネの批判については、戦後の「非一知」についての講演のひとつ「死の教え」を参照のこと（「*L'enseignement de la mort*», *O.C.*, t. 8, p. 206）。この点についてはまた、岩野卓司、『ジョルジュ・バタイユ — 神秘経験をめぐる思想の限界と新たな可能性 —』、水声社、2010年の第1章「内的経験のブランショ革命」を参照のこと。

⁸ *L.P.*, *O.C.*, t. 3, p. 39.

⁹ *Ibid.*, p. 47.

¹⁰ *Ibid.*, p. 41.

¹¹ *Ibid.*, p. 51.

¹² *Ibid.*, p. 47.

言される神のありかた、すなわち神の本性がたえず自分を超越していくことにあることを示していると言えるであろう。神は、善や愛という自分に固有の属性ばかりでなく、悪や憎悪という本来持たない属性まで内包することによって、その限界を突破して神であることが不可能な存在に化していくのだ。バタイユの「無神学」はこの不可能な神性に呼応するものと言えるであろう¹³。

c) 罪悪感の秘密の起源

次に物語は「W. C. 『眼球譚』序文」という章の中で話者の悔恨、その神経症、その幻想ファンタズムらの起源を明るみにする。そこでは、「小さきもの」のように汚れた忌まわしい幼少期の事実が披露される。この事実こそが、罪悪感の起源に他ならない。『W. C. 』は『眼球譚』以前に書かれた実際の小説のタイトルである。残念なことに、バタイユはすでにこの小説を廃棄してしまっていた。「W. C. 『眼球譚』序文」という題名から、この章の内容が『眼球譚』と密接な関係にあることがわかるであろう。実際、その第二部「暗合」（新版では「おぼろげな記憶」）には、「W. C. 『眼球譚』序文」と重複する記述がいくつもある¹⁴。

この章は、幼少期の忌まわしい思い出が父親をめぐるものであることを語っているが、ふたつの重要な点を指摘しておこう。

(1) 糞をたれる父

話者が幼少であった頃、彼の父はすでに視力を失っており、その四肢は麻痺していた。『眼球譚』の「暗号」と照らしあわせると、その病が梅毒からくる脊髄癆であることが分かる¹⁵。体の不自由な父が用を足すために、話者は父が糞壺の上に腰を下ろすのを手伝っていた。

それ以上に私を打ちのめしたのは、幾度となく父が糞をたれるのを目撃したことである。盲目で体の麻痺した彼はベッドから降りた。（父はひとりの人間の中に盲目と四肢の麻痺が同居していた。）彼は苦勞してベッドから下り（私が彼を手伝った）、糞壺の上に腰を下ろした。シャツ姿で、たいていは木綿の帽子を被っていた。（顎鬚は灰色で先が尖がっていたが、手入れは行き届いていなかった。鼻は大きく驚鼻であった。目も大きかったが落ち窪んでおり、じっと虚空を見つめていた。）閃光のような苦痛が襲うこともあり、彼は獣のよう

¹³ この点については、岩野、「至高性と分身 —— ジョルジュ・バタイユ『わが母』における神学と近親相姦」，前掲，を参照されたい。

¹⁴ *H.O.P., O.C.*, t. 1, pp. 71-78, *H.O.N., O.C.*, t. 1, pp. 606-608.

¹⁵ *H.O.P., O.C.*, t. 1, p. 76.

な叫び声を挙げ、折り曲げた脚を伸ばして腕で抱え込もうとしたが無駄であった¹⁶。

この父は尻の割れ目の意味での「小さきもの」を連想させる。肛門は排泄する器官である。だから、糞をたれる父は換喩的な意味で「小さきもの」と言えるであろう。「小さきもの」である者は、話者ばかりでなく父自身でもあるのだ。そうであるから、「小さきもの」の悔恨は、父の思い出の中に複雑に根ざしている。隠蔽されなければならない汚れた過去は、糞をする父の姿によって表現されている。この恐るべき事実は、話者の記憶に深く刻まれているのだ。

(2) 遺棄された父

汚れた過去はそれだけにとどまらない。この章は、『眼球譚』には述べられていない別の事実を暴露している。第一次世界大戦でドイツ軍がフランスに侵入し北部の町ランスを包囲した際に、話者は母とふたりだけで町から逃げて体の不自由な父を置き去りにした。ドイツ軍が撤退したあとに家に戻ってきたら、父はすでに死んでいた。

1915年11月6日、ドイツ軍の前線から4.5キロメートル離れたところにある砲火の只中にある町で、父は見捨てられて死んだ。

8月14日にドイツ軍が侵攻した際に、母と私は彼を見捨てた。

私たちは彼を家政婦にゆだねた。

ドイツ人たちは町を占領したが、その後撤退した。それで、町に戻ることが問題になった。戻ることを考えるなんて耐えられないので、母は気が変になった。その年の終わりごろ、母はよくなった。彼女は私をNに帰すのを拒んだ。父からの手紙を受け取ることはめったになかったが、彼はほとんど常軌を逸することとはなかった。父が危篤だと知ると、母は私といっしょに帰宅するのを受け入れた。私たちが到着する数日前に、彼は子供たちに会うことを求めながら死んだ。ねじで留めた棺を私たちは部屋に見つけた¹⁷。

「小さきもの」に伴われている罪悪感の起源がここにある。この経験が罪の痕跡を記憶に深く刻みつけている。思い出は、父が糞をする姿とともに父の遺棄とも関係している。これらの事件が「小さきもの」をめぐる話者のオブセッションの根底にあるのだ¹⁸。

¹⁶ *L.P., O.C., t. 3, p. 60.*

¹⁷ *Ibid., pp. 60-61.*

¹⁸ タデ・クロソフスキー、ジャン＝ルイ・ボドリー、ミシェル・シュリヤ、セシル・

ここには話者の自己分析が入ってくる。オイディプスの物語が登場するのだ。話者はギリシア悲劇の名高き主人公に自らをなぞらえる。「父は私のことを目が見えない（絶対に見えない）と思いこんでいたので、私はオイディプスのように目を引きぬくことはできない。／私はオイディプスのように謎を見抜いた。誰も私ほど深く見抜いた者はいなかった¹⁹。」話者の思い出は、オイディプスの物語と類似している。ドイツ軍の侵入から逃れるために、父を置き去りにして息子と母が町を後にし、戻ってきたときは父は死んでいたという事件の「謎」を、彼は見抜いていく。それはオイディプス的な欲望である。父を死に追いやり、母を独占したいという無意識の動機である。ソフォクレスの古代ギリシア悲劇では、自分の知らないうちにオイディプスは父

モスコヴィッツといった研究者が指摘しているように、『小さきもの』が『有罪者』と密接に関係を持っているのは否めない事実である（*O.C.*, t. 5, pp. 504-505, notes par T. Klossowski: J.-L. Baudry, « Bataille ou le temps récusé », *Revue des sciences humaines*, n° 206, février 1987, p. 18, note: M. Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre*, Gallimard, 1992, pp. 374-375: C. Moscovitz, *op. cit.*, pp. 1139-1140）。実際、『有罪者』も『小さきもの』と同じように、バタイユの幼年時代と父の記憶を明かしている。「苦行者の顔のイメージ、燃えるような目、突き出た骨は私を圧迫する。私は自分自身のことを思い浮かべるからだ。私の盲目の父は落ち窪んだ眼窩とやせた鳥のような長い鼻をもち、苦痛の叫びをあげ、静かに長い時間笑っているが、私はそんな彼に似ている者になりたい！ 私は闇を問うことをなしで済ませることはできない。苦悶し仕方なしに苦行を強いられ人の不安をかきたてるこの者を子供のころいつも目の前で見ていたことで、私は打ち震えている」（*L.C.*, *O.C.*, t. 5, p. 257）。ある手帳の中では、バタイユは死にゆくロールの顔を悲劇的な父の顔になぞらえている。「同様に私は恐ろしく思った。死にゆくロールの顔があまりに恐ろしく悲劇的であったあの男の顔に漠然と似てきたのであった。それは、半ば痴呆した空虚なオイディプスの顔である。この類似は彼女が長く苦しんでいる間いつそうよく見られた。それは、熱が彼女を蝕む間、恐らく特に私に対する彼女の恐るべき怒りと憎悪の発作の間である。私はこういうかたちで自分の出会ったものから逃げようとした。なぜなら、私は父から逃げたからである。（25年前、ドイツ軍が侵攻したとき、私は呪われた境遇にある彼を見捨てて母と逃げた。彼はランスにただひとりでとどまっており、家政婦の世話にゆだねられた。彼は盲目で四肢が麻痺しほとんど絶えず苦痛の叫びをあげていた。）私はロールから逃げた。（彼女から精神的に逃げた）」（*ibid.*, p. 504, notes par T. Klossowski）。こういった前提にたちながら、シュリヤは次のように述べている。「『マダム・エドワルド』は『内的経験』の鍵である。それは、『小さきもの』が『有罪者』の鍵であるのと同じである。淫蕩な鍵である」（Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre*, *op. cit.*, p. 374）。「『小さきもの』は、より赤裸々で簡潔で破壊的になった一種の『有罪者』である」（*ibid.*, p. 375）。しかし、これは言い過ぎなのではないのだろうか。『小さきもの』と『有罪者』が密なる関係をもつのは確かであるが、『小さきもの』が『有罪者』の鍵であってもその逆でないならば、『有罪者』における有罪性の意味は単純に『小さきもの』における幼少期の罪悪感に還元されてしまうであろう。

¹⁹ *L.P.*, *O.C.*, t. 3, p. 60.

を殺し母と結婚するが、その事実を知ってしまうとその罪悪感に耐えられず、目をつぶし自分の王国を去る。フロイトはこれをヒントに、幼児期における家族の葛藤を見つけ、有名なオイディプス・コンプレックスの精神分析理論に至るのであるが²⁰、おそらくフロイトの影響下であろうが、『小さきもの』の話者もオイディプスと同一化して同じ解釈を繰り返している。彼が強調する点は、無意識における父の殺害である。その上、母への愛着もある。彼はこうも告白している。母が死んだとき、「夜、母の死骸を前にして、私は裸でオナニーをした […]」²¹。父を憎悪し母を愛する点で、話者はオイディプスと同じ動機を示している。回想を分析する話者は、精神分析に継承され再解釈されたオイディプスの神話に無意識の動機を求めているのだ。

2) 分身の増殖

すでに指摘したように、話者が精神科医を批判しているのは確かであるが、「W. C.」の章が母をめぐる父との競争心を暗示しており、ここで家族の三角形を前提にしているのもまた確かである。それでは、この物語には起源としてやはりオイディプスの三角形があるのだろうか。『眼球譚』（特に初版）が示しているような精神分析的な「暗号」が『小さきもの』にも存在しているのであるか。そうすると、バタイユの「家族－神学」は家族の経験の中に原初の場面を求めていることになるのだが、果たしてそう言えるのだろうか。

a) オイディプスの三角形に先行する二重性

まずは父を検討してみよう。「尻の割れ目」である「小さきもの」が父の肛門を暗示していることを思い起こしてもらいたい。父は盲目であり、その四肢は梅毒で麻痺している。これは、「尻の割れ目」のように去勢された無力なペニスのイメージを与えてくれる。父は「小さきもの」である限り、去勢され盲目であり、いわば女性化されている。しかしまた、父が誇り高き男であることにも注意しなければならない。彼が生きた経験がどんなに苛酷であろうとも、彼は宗教による救済と妥協せずは無神論の確信を放棄しなかった。「無宗教者である私の父は、司祭を拒否して死んだ²²。」この力強い父

²⁰ S. Freud, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse und neue Folge*, Studienausgabe, Bd., t. 1, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1969.

²¹ L.P., O.C., t. 3, p. 60.

²² *Ibid.*, p. 61.

に対し、話者は畏敬の念を抱いている。「パパの盲目の笑いの中には時折何と『恐るべき誇り』があることか²³。」「悔恨の不在」という章では、父の男性的な側面が強調されている。「パパは亀頭である²⁴。」つまり、無力になったペニスではなく、「宇宙を生み出す」「快楽を味わう亀頭²⁵」なのだ。父は女性化されているとともに男性的でもある。去勢されていても男根的でもある。その存在はすでに分割されており、だから両義的であると言えるであろう。

この分割可能性は、父、神、話者の関係からさらに増殖を続けている。話者の話を信じるならば、彼は『眼球譚』執筆以前に『W. C.』という作品を記していた。この小説のおぼろげな記憶が『眼球譚』には見出される。ひとつの例は、『眼球譚』の作者のペンネーム、ロード・オーシュ（オーシュ卿）によって示されている。「ロード・オーシュの名は私の友人のひとりの習慣と結びついている。苛立つと、彼はもう「便所に行け（オー・シオット（aux chiottes!））！」とは言えずに「オー・シュ（aux ch'）」と言った。英語のロードは、（聖なるテキストでは）神を意味している。ロード・オーシュは用便する神である²⁶。」神の用便はW. C.を反響したものであろう。そして、このことはまた、息子の記憶の中にありありと焼きついている父のイメージが神の中に反映している事実を思い起こさせる。だから、神と父は二重にオーバーラップしている。その上、話者には神の狂気についての幻想がある。狂った神に父の発狂の物語との暗黙の関係を読み取ることは可能であるだろう。「（戦争の一年前に）印象の強い夜に私の父が発狂したとき、母は郵便局に電報を打ちに私を遣わした²⁷。」神と父は狂気の糸を通して繋がっている。この排泄する神はまた男根中心的である。「神は司祭ではない。亀頭なのだ […]」²⁸。」父が亀頭であるのと同じように、神もまた亀頭なのだ。「快楽を味わいながら宇宙を生み出す」亀頭に他ならない。しかし、このように男性的で、男根的であるとはいえ、神はまた「小さきもの」であり、肛門のように去勢され、女性化されている。光についての言葉を用いるなら、神は「死んだ星の輝き²⁹」であるとともに「太陽の裸体³⁰」である。肛門と太

²³ *Ibid.*

²⁴ *Ibid.*, p. 65.

²⁵ *Ibid.*

²⁶ *Ibid.*, p. 59.

²⁷ *Ibid.*, p. 39.

²⁸ *Ibid.*, p. 61, cf. *H.O.P., O.C.*, t. 1, pp. 76-77.

²⁹ *Ibid.*, p. 40.

³⁰ *Ibid.*, p. 60.

陽の一致は、『太陽肛門』の中に模範的に現われる重要なテーマであり、バタイユの作品全体を貫いているものである。これは、男根的なものと去勢との一致を意味しているのではないのだろうか³¹。

次に、話者と神の関係に移ってみよう。神についての話者の幻想^{ファンタズム}に、神と自分との同一化を読み取ることができるであろう。神が狂っており、また話者が神経症であるという事実を確認しておこう。ここから神の狂気と神経症者の奇妙な一致が生じる。「神経症とは、神が抱く不安へのノスタルジーである³²。」こういった点からも、神は話者の分身なのではないのだろうか。その上、放蕩、悪、エロティシズムについて、彼らは共通の関心を抱いている。神に関して、バタイユはこう書いている。「放蕩とは、異論の余地なく卑俗な仮面を被った神の不可能なものである。」「悪における神の洗練さ」、あるいは、「『売春宿』におけるように、神は『品定め』をする³³。」神のこれらのイメージは、売春宿を徘徊する話者のイメージと不思議に重なりあっている。彼は自身について次のように描写している。「私は過去の放蕩の思い出に喜びを見出す。私はそのきわどい細部をながながと思いだす。たいていの場合、私はそのことで幸福感に浸る。尻、口、胸の味わい、特に裸の感覚。他の娼婦の誰よりも終わりなく裸の娼婦。時折、そのストッキング、ベルト、外套の中で彼女は奇跡的なくらい裸だ。別の折には、裸の足を見せながら、まったく裸である³⁴。」放蕩する話者と放蕩する神の奇妙な一致。悪徳やエロティシズムをその属性に数えることで自身を超え出て不可能なものとした神は、娼婦を抱きながら不可能なものに近づく話者自身と二つ重ねになっていると言えるであろう。

こういった同一化は同じように話者と父の間でも生じている。話者が思い出す過去は、彼が「小さきもの」であった幼少期である。この時代は、隠すべき恥の時代という意味での「小さきもの」でもあった。ところで、肛門か

³¹ « L'anus solaire », *O.C.*, t. 1, pp. 79-86. また、『有罪者』や『不可能なもの』で登場するディアヌス (Dianus) も、「神 (Dieu)」という語と「肛門 (anus)」という語が結びついたものである限り、父性的で男根的なものと去勢されたものの一致を表現している。シュリヤはこう述べている。「バタイユは戦時中 […] ディアヌスを三番目の偽名とみなしていた。ディアヌスは神と肛門を縮めて発音せざるをえない […]」 (Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre*, *op. cit.*, p. 373, note)。モスコヴィッツもまたこう書いている。「『小さきもの』は神=肛門である。後に『有罪者』となるものの数ページをバタイユが 1940 年に『ムジュール』誌に発表した偽名のディアヌスの親戚である」 (Moscovitz, *op. cit.*, p. 1140)。

³² *L.P.*, *O.C.*, t. 3, p. 41.

³³ *Ibid.*, p. 47.

³⁴ *Ibid.*, p. 46.

ら糞をたれる姿が話者の印象に残っているという点で、父もまた「小さきもの」である。そうだから、「小さきもの」という意味で、彼らは一致している。その上、父と神の一致という事実から、また神と話者がともに罹っている神経症という事実から、話者と父のあいだには共通の関係がある。さらには、話者は父と同じように盲目であると告白していることには注意しなければならない。彼はその悲惨な運命にあるにもかかわらず宗教的救済に訴えることなく隠喩における盲目を担っている。話者と父のあいだの類似は、次のように語られている。「今日、私は自分が途轍もなく『盲目』であるを知っている。というのも、Nでの父と同じように自分が地球上に『見捨てられた』人間であるからである³⁵。」話者は見捨てられた盲目の父と同じように、キリスト教の救済を求めることなく孤独に生きていくのだ。彼らの同一性に関して、もうひとつの重要な点も指摘しなければならない。『小さきもの』が自伝の物語であり、話者と作者が一致しているという前提に立って読解を推し進めてみよう。バタイユはこの物語をルイ 30 世というペンネームで出版しているが、この偽名は架空のフランスの王を示唆している。ここではフランス王の末裔を意味しているのであろう。また、彼の母がマリー＝アントワネットという名であり、ルイ 16 世の王妃と同じ名を持っていることも考慮にいれてみよう³⁶。そうすると、ルイは母の夫の名、つまり父の名でもあることになる。ここから、父と息子のあいだの名の共有を指摘できないだろうか。彼らは共通の性格と名前を通して二重写しになっているのだ。ところで、ルイはギロチンにかけられた王の名でもある。この処刑台は「W. C. 」という章の中に登場する。曰く、「『W. C. 』のデッサンは目を表わしていた。処刑台の目を。孤独で、太陽のように輝き、まつげを逆立て、目はギロチンの眼鏡のなかで見開いていた³⁷。」父は象徴的な意味でギロチンにかけられ、去勢された者である。と言うのも、肛門は去勢の跡であり、無力に糞をたれるだけの肛門によって父は表象されているからである。話者もまた「小さきもの」であり、父と共通の名を持っているがゆえに、象徴的にギロチンにかけられている。共にマリー＝アントワネットに欲望を抱く話者と父、つまり母を欲する話者と妻を愛する父は、その欲望のため共に去勢されつつ互いに同一化しあっている。

³⁵ *Ibid.*, p. 61.

³⁶ 私たちはバタイユの家族の系譜について見事に調査し教えてくれたシュリヤのすばらしい研究を参照している (Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre, op. cit., annexe « Mes paysans d'ancêtres ? », pp. 603-605*) 。

³⁷ *L.P., O.C.*, t. 3, p. 59.

ここで問題となっているのは、父、神、話者がそれぞれ内面において自己を分割しているという事実ばかりではなく、彼ら相互が同一化しあっている点にもある。彼らのおのおのが同時に自己分裂し互いに同化しあうのだ。内的な二重性は外的な二重化につながっている。だから、分身の増殖が生じるわけである。

それではこれら分身関係を繋ぐ絆とはどういうものであろうか。それは「不可能なもの」である。私たちはすでに神の不可能な性格を認めていた。「神は教会にとって不可能なものの完成された仮面である³⁸。」神性は、それが諸々の限界を踏み越えるならば、本質的に不可能なものと言えるであろう。エロティックな経験において不可能なものに接近すると告白する話者の場合も同じである。「完全な愛の行為は、夜、街頭で自分を裸にすることであろう。それはひとりの知恵遅れの女性のためにではなく、確実な沈黙の中で私ひとりで生きることの不可能性のためにである³⁹。」父もまた不可能なものとなった存在であろう。この見捨てられた人物において重要なのは、話者が「W. C.」の章の中で記述している「おぞましい誇り」や「盲目の微笑」ばかりではなく、「悪」の章に見られる「『死にゆく者たち』の自由⁴⁰」でもある。「もう来るべき時間への配慮がない⁴¹」から、死にゆくものは自由と言えるであろう。彼は可能な未来への利害からも可能な過去への悔恨からも自由である。言い換えれば、彼は死にゆくことしかししないから、過去と未来のあらゆる可能事とも相容れないし、「不可能なもの」と化すのである。

父、神、話者のあいだのこういった関係をどのように読むべきであろうか。それらはオイディプス・コンプレックスのまわりを回転している衛星のような存在なのであろうか。この問いに対する答えが肯定的であったとしても、オイディプスの三角形に先行する諸々の関係を考えることはできないのであろうか。父、神、話者が不可能なものに属するから、彼らの二重の関係が現れるという事実を、どう考えたらいいのだろうか。パタイユの「家族神学」は、オイディプス・コンプレックスの図式を肯定しているようであるが、しかしまたこの図式に還元されない分身関係を生みだしてもいるのだ。

³⁸ *Ibid.*, p. 47.

³⁹ *Ibid.*, p. 36.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 52.

⁴¹ *Ibid.*, p. 51.

ｂ）起源の不在

物語の流れと章の秩序を尊重して作品を読んでいくなれば、話者の悔恨は幼少期における父との関係にその起源をもつと言えるかもしれない。彼の幻想、病気、エクリチュール、さらにはロード・オーシュというペンネームもそのことを証言している。これは『眼球譚』（特に初版）に類似している。と言うのも、その第二部「暗号」（新版では「おぼろげな記憶」）では、物語のイメージがどのようにして作家の幼少期の「秘密」と対応しているかを分析しているからである。もちろん、『眼球譚』第二部「暗号」では、物語と幼少期の対応関係は精神分析的に詳細に示されている。それに対し『小さきもの』は、こうしたはっきりわかる答え合わせの形はとっておらず、幼少期についての章を提示することしかしていない。こういった違いはあるものの、この二つの作品は起源の設定と対応という点では類似している。明確ではないとはいえ、作品から汲み取れる話者の意図に従い精神分析の図式をそこに見るならば、父との経験が特権的になり、これこそが神の幻想の起源となるであろう。そうすると「家族神学」は、オイディプス的な家族の経験に還元されてしまうであろう。養をたれる父、見捨てられ死んでいく父、正気を失った父、こういった父親のイメージが原光景なるものをつくりあげることになるだろう。だから、『小さきもの』では、父のイメージは神のイメージや話者のイメージと重なることになるだろう。かくして分身関係は父の項に由来しているという訳である。作家の意図に従うこういった解釈を認めつつも、私たちはその反対もまた言うことができるということに気づくべきではないだろうか。原光景はまた語りによって条件づけられていると考えるべきではないのだろうか。父の起源の物語はまた話者の幻想ファンタズムによって歪められているのだ。彼は記憶について次のように語っている。「記憶は、苦悩の機械仕掛け、存在の限界の機械仕掛けである。（それによって苦悩、限界、存在の孤立と結びついた喜びが得られる。） それでも、記憶も完全に未来の餌食になる⁴²。」父についての苦痛に満ちた記憶もすでにして話者の未来への配慮によって歪められ汚されていることになる。その結果、父の記憶もこういった変形とともに表象されることになる。こういう訳だから、父の物語は起源として決して特権化されることはない。神の記述、父の物語、話者の自己についての反省は、彼らの各々の純粋さを汚すことにより互いに侵犯

⁴² Ibid., p. 50.

しあっている。神と父、話者と父、話者と神という二重の関係は、ひとつの項を起源として特権化してはいない。神は創造の神話によっても特権化されないし、父も家族の物語によって特権化されない。話者もそのエクリチュールによって特権化されてはいない。彼らの関係は分身の戯れに他ならない。一見すると、『小さきもの』は話者の幼少期を特権化しながら手つかずの起源を追認しているようにみえるかもしれない。ただ、私たちの読解が示すように、その内的な構造において、この起源を解体するものが伏在しているのだ。フォアゾクラティカー、プラトン、アリストテレス以来、形而上学の思弁は現代にいたるまで起源の探求を手放すことはないし、その影響のもとで西欧の諸々の学問やものの見方もこの前提を暗黙の裡に共有しているのであるが、こういった手つかずの起源といった発想自体再び問いにさらされる必要があるのではないのだろうか。

このように父の記憶の特権を疑問視することは、作品の伝記的解釈の限界について考える機会を私たちに与えてくれる。文学作品の伝記研究が依拠しているのは、フロイト流の精神分析が依拠している「作家」と「実生活」の素朴な関係である。作家の幼少期や実生活が、作品に影響を及ぼすという発想である。ここでは幼少期や実生活が起源となり、作品はその効果が産出される場ということになる。こういった研究では、起源の形而上学が幅をきかせていると言えないであろうか。この点では、『小さきもの』の話者による自己解釈や『眼球譚』第二部の話者による答え合わせも同じだといえるであろう。しかしながら、私たちの読解が示すように、バタイユが思い出すと主張している自伝的起源、つまり『小さきもの』や『眼球譚』における父と子は、話者や作者の想念によって何らかのやり方ですでに歪められている。私たちが自伝の中に思想の起源を探るとき、すでにして起源ならざるものが介入しているということに、気づく必要があるだろう。ここでは神の例をとってみよう。家族の起源によって神性についての思想を説明しようとするとき、家族の起源も神性の思想に根拠づけられていることを同じように理解しなければならない。というのも、幼少期を思い出すこの作家はまた「神」、「神的なるもの」、「聖なるもの」についての観念を持っているからである。しかし、バタイユの伝記研究として名高いミシェル・シュリヤの『ジョルジュ・バタイユ、作動しつつある死』にはこの二重性についての配慮はない。彼はこう書いている。「バタイユは決して最終的には無神論者ではなかった——少なくとも無神論が彼にとって問題にはならなかったという意味であるが——が、それは神がいないからでもないし、ましてや神が死んだから

ではない。そうではなく、神よりも強力なものが存在するからである。盲目であるがゆえにより強力である。（「不具の神は盲目である。その時、見ることは私の不具である」）。盲目でありかつ狂気である。ジョゼフ＝アリストイド・バタイユ（ジョルジュの父）は、彼なりの流儀で神の『狂気』であった⁴³。」「狂っている。『雲の下でわれわれを活気づけるこの神は狂っている。私はそのことを知っている。私がそうなのである。』（バタイユが神に与える特色がどんなにねじれていても、その各々が彼の父の思い出からあるやり方もしくは別のやりかたでどれくらい借りてきたかを繰り返し述べる必要はあるのだろうか⁴⁴。）」シュリヤの読解は、バタイユの父と「神」、「神的なるもの」、「聖なるもの」の起源を同一視することしかない。「家族神学」のひとつの項を起源として規定するこの解釈はまた、この規定に反したり揺さぶるものを忘却していると言う点で形而上学の思想に属している。どうして安易に手つかずの起源を設定してしまい、知らず知らずのうちに抑圧に加担してしまうのであろうか⁴⁵。私たちの読みでは、神的なるものの思

⁴³ Surya, *op. cit.*, p. 32.

⁴⁴ *Ibid.*, p. 370. エドワルドの神々しい「ぼろきれ (guenilles)」(女陰のこと)に関して、シュリヤは狂気の父にその起源を求めながらひとつの解釈を提示している。「裸の猥雑な女性(＝エドワルド)は、神である。彼女は自分の『ぼろきれ』を示し、それが神の『ぼろきれ』であるから見るように命じる。彼女はまたピエールに「ぼろきれ」に口づけをするようにも命じる。『接吻して！』と彼女は言った。(…)私は震えていた。私は動かないで彼女を見つめていた。彼女は私に優しく微笑んだので私は震えていた。とうとう、私はひざまずいてよろめいた。その生々しい傷に口づけをした。』」これは体が不自由で頭のおかしな父から遠い話ではない。彼はかつて彼なりのやり方で息子に裸で「ぼろきれ」のような自分を見るように命じていたのだ。ロード・オーシュは「排泄する神」ではなかったか。「ぼろきれ」という言葉の異様さにどうして立ち止まるべきではないのだろうか。自分が裸でぼろきれのように神でもあると告白する、美しくもあるが気のふれた娼婦が、どうして萎えて生気のない太腿のあいだにある動きもしない器官を思い起こさないのだろうか」(*ibid.*, pp. 372-373)。

⁴⁵ 物語と生に関しては、シュリヤは物語の内容は生を反映していると考えている。「私は繰り返し次のように言うことができた。バタイユの物語の中で多かれ少なかれその実人生から借用してないものはない。もしわれわれが彼の生の全てを 細部にわたって知っているならばその痕跡を再び見いだせないような物語はひとつもないのだ。想像上の人物として読むように全てが仕組まれている —— もちろん全体としてはそうであるのだが —— マダム・エドワルドも、バタイユの最も愛した者たちの中にモデルがいた」(*ibid.*, p. 477)。シュリヤは生と物語のこの関係を「分身化 (dédoublement) と非常によく似た何か」(*ibid.*)と呼んでいる。「分身化」と言う言葉が「完全に不十分である」(*ibid.*, note, p. 477)という留保をつけてはいるが。この「分身化」なるものは、結局、作家の実人生の分身として登場人物を創造することにある。『不可能なもの』と『C神父』における分身は、そうだから模範的に「作家の実生活」を表わしている。というのも、このふたつの作品は「その作家の

考と幼少期の思い出は、互いに重なり合い二重のものとなっている。それらは常にその境界を守りながら互いに侵犯しあっている。こうした事実を暴露することで手つかずのものの不可能性を立証し、形而上学の発想の呪縛を逃れることができるのではないのだろうか。そうすることで、読解の新たな可能性に身をゆだねることができるのではないのだろうか。

生と奇妙にも遠くて近い関係を持っているからである。その関係の疑いえないただひとつの要因は、この『分身化』である」 (*ibid.*, pp. 477-478)。シュリヤが主張する「分身化」は、私たちが考察してきた分身とは異なり、起源と派生、原因と結果、オリジナルとコピーといった関係を前提にしている考え方である。